“なでしこジャパン”の活躍

ワールドカップドイツ大会で海外研修

釧路地区サッカー協会副会長　上田　徳郎

寄稿①【７月２７日（水）掲載】

前文

女子サッカーの世界一を決めるワールドカップドイツ大会で、日本チーム（なでしこジャパン）が優勝し、日本国中が歓喜に沸いた。この大会に日本サッカー協会の海外研修の受講生として参加し、４試合を観戦した釧路サッカー協会の上田徳郎副会長（日本サッカー協会公認Ｃ級ライセンス保持）に研修の様子などを５回連載で紹介してもらった。

歓喜に沸いた日本

海外研修の受講決定

５月２６日午後９時、海外研修の受講決定通知のメールをＪＦＡ女子サッカー事務局の今関葉子さんから受け取り、感激と同時に一カ月後に迫った研修の準備であわただしさに追われました。

サッカー王国、とも言われるドイツで、世界の頂点を目指し１６カ国によるサッカーの最高峰、ＦＩＦＡ（国際サッカー連盟）女子ワールドカップドイツ大会が６月２６日から７月１７日まで開催されることを世界中のサッカーファンと共に心待ちにしていました。

オープニングゲームは、７万人収容できるベルリンのオリンピックスタジアムで行われ、その他の開催地もアウグスブルク、ボーフム、ドレスデン、レバークーゼン、メンヒェングラートバッハ、ジンスハイム、ヴォルフスブルクで決勝戦はフランフルトで行われました。試合会場へはバスで７時間かかるため飛行機での移動となり、北海道内の各地を飛び廻っている感じで強行な日程でした。

しかし、なによりうれしかったのは、日本女子代表チームの『なでしこジャパン』が、ドイツ大会で五輪、W杯を通じて初のメダル獲得を決め、さらに決勝へ進出したことは、日本の女子が年齢制限のないサッカーの世界大会ではもちろん初めて。そして驚きは、ＦＩＦＡランキング４位の日本が、これまで一度も勝ったことがない一位のアメリカに決勝で挑戦したことで

した。

結果は“ついにやった！”　先取点と怒濤の攻撃のアメリカを凌いで、延長戦からＰＫ戦へと持ち込み、ＦＩＦＡ主催大会での日本サッカー界男女を通じて初めての優勝を飾ったのです。“なでしこＪＡＰＡＮ万歳!!”

“なでしこＪＡＰＡＮ”の優勝は東日本大震災復興と被災地のみなさんに元気と勇気を与えることができた。世界一の女子チームでした。

歴史に残るこの大会へ指導者研修として参加できたことは、私自身にとっても生涯忘れることのできない海外研修となりました。

ドイツでの４試合観戦を中心に報告させて戴きます。

フランクフルト到着

第１日目（６月３０日・木）

成田空港を午後０時１５分発の直行便でフランクフルトへ。所要時間１２時間５分の長旅でしたが、到着後専用バスで４５分後、フランクフルトスタジアムへ到着しました。時差が７時間ありますので、現地時間では午後７時。スタジアムでハンバーガーを食べながら、同８時４５分キックオフの優勝候補ドイツ対ナイジェリア戦を観戦しました。スタジアムは４万９０００人収容ですが、地元ドイツ応援でほぼ満員。試合開始前からウエーブの連続で選手とファンの一体感で盛り上がりました。

チャンスはあり得る

このスタジアムが決勝戦に使われる会場とのことでした。素晴らしい施設とピッチ。「サッカーの夢が天空にまで伸びていく都市」フランクフルトの真骨頂でもあります。試合はドイツが勝利しましたが２００３、２００７年と２度も優勝しているチームにしては、パスミス、ミスキックが目立ち、審判のジャッジメントに助けられている感もあり、この程度が本物なら“なでしこ”も勝利するチャンスはあり得ると感じていました。

研修の試合分析でも関西サッカー協会女子委員会Ｕ-１８部長・竹内先生からもそのような指摘がありました。試合が終了しホテル到着は夜中の０時過ぎでした。ヨーロッパは白夜ですが、さすが夜も更けて眠りに就きました。

ヨーロッパの中心に位置する大都会フランクフルトは伝統と斬新さ、商業と文化、静寂さとエキサイティングなコントラストがとても魅力的な町と聞いていましたがマイン川畔を散歩できなかったのがとても残念でした。

徳郎の思い･･･

フランクフルトの天空を見ながら、日本の子どもたち一人ひとりがサッカーを楽しみ、仲間を大切に、礼儀正しく明るい人間に育ってほしいと心から願いました。

寄稿②【７月２８日（木）掲載】

メキシコに圧勝

研修の課題を説明

第２日目（７月１日・金）

朝９時３０分からホテル会議室で指導者研修のミーティングが行われました。吉田弘（日本サッカー協会Ｕ-１９、Ｕ-１６日本女子代表監督、ナショナルコーチングスタッフ）、木村康彦（ナショナルトレセンコーチ、今回の通訳も）両氏による研修のミッション内容と課題が説明されました。

①ワールドカップ各チームのゲーム分析②ドイツ女子クラブチーム訪問③サッカー王国といわれるドイツ文化との触れ合いと歴史―、これらを自己分析し、帰国後地域への還元や指導に生かすことを考えてとのことでした。

公認指導者研修には道内では私と札幌在住の鷲津裕美さん（北海道女子委員長・ＰＨＱ女子活動推進事業担当）の２人。大阪府から２人。岡山、群馬、広島、栃木、兵庫、静岡、愛媛県からの１１人参加でした。ミーティング終了後、１０時３０分専用バスでレバークーゼンへ向かいました。所要時間３時間。ケルンとデュッセルドルフの中間に位置しライン川畔にある美しい自然が満喫できる町でした。

道路はアウトバーンと呼ばれる高速道利用でビュンビュン飛ばします。ドイツでは一部分アウトバーンでの速度制限はありますが、大体は制限はありません。これも自己責任からの法律です。

午後３時キックオフ、日本対メキシコ戦です。観衆２万２２９１（３万人収容）。ゲーム分析では、日本は４-４-２のシステムで沢穂希キャプテンを中心とした組織的ディフェンスとサイドチェンジ、スペースへのボール出しなど技術的センスとチーム全体の仕上がりの良さが強調された試合となりました。

鮫島彩選手の再三にわたるオーバーラップは見事でしたが、その分メキシコのディフェンスの甘さが目立ちました。また、メキシコが澤選手の得点感覚などの情報収集を確実に行っていたのか疑問もありました。国際大会でのゲーム分析には情報戦も重要で、今大会に出場していない中国なども来場して、他国のチーム分析を行っています。沢選手のハットトリックもあり、なでしこジャパンの圧勝となりました。ケルンへのバスの中、みんなで笑顔でホテルへの帰途となりました。

徳郎の思い･･･

「ライン川畔で輝きを放つスポーツの町レバークーゼン」から日本の子どもたちに…。チャ

レンジすること！失敗しても大丈夫！目的はゴールだよ！と教えていきたい思いが募りました。

コーチングの指導

第３日目（７月２日・土）

朝８時３０分、指導者研修ミーティングの後、ケルンホテルから専用バスでデュイスブルクへ向かいました。所要時間２時間をかけて行く先は、日本代表ＦＷ・安藤梢選手の所属チーム「ＦＣＲ２００１Ｄｕｉｓｂｕｒｇ」。ＦＣＲデュイスブルクは女子ブンデスリーガで快進撃を続け、１９９８年と２０００年にはリーグ制覇を果たしている強豪チームです。

オーナー、会長、監督の案内で施設やクラブの財源、選手育成、トレーニング、戦術、コーチング（男女の違い）など詳しく説明を受けました。

施設面では、グラウンド三面（天然芝、人工芝、アンツーカー）で、人工芝では冬の積雪時も除雪し使用しているそうです。財源は７０％スポンサー契約、１０～１５％協会、その他チケット会員会費などで賄っているとのことでした。

４１才のマルコケテラー監督は、Ｕ２３のコーチを経て２００９年コーチから監督に就任し、戦術・戦略面でもセンターライン（ＧＫ・ＭＦ・ＦＷ）の強化、選手の配置や積極的にボールを奪いに行く、ボールポゼッション、ボールタッチ数を少なく攻める、バックからボランチ経由の上がり（一人で行かない）などボードを使って詳細に説明して頂きました。

男子と女子選手へのコーチングの違いは、フィジカル（身体能力）、スピード、テンポ、女子選手には説明を多くすること、感情起伏などメンタル面の違いはあるが、テクニックはほとんど男女同じに指導しているとのことでした。指導者の心構えは、オープンマインドで、公平に選手と対面し、リスペクト（相手を尊敬）することが大事と強調していました。

小学１年生から４年生を指導している自分としても、楽しく、明るく、元気に、もっともっとサッカーを好きになれる練習方法や、メニュー作りが大切なことを学びました。

安藤選手もドイツ語学校に通い、コミュニケーションが取れてきたことでドイツ選手とも仲良くなり、今はハッピーに契約延長もできました。今後はアシスト・ゴールなど結果を自ら求めてほしい、など話していました。日本チームに取っても献身的な動きの安藤選手は、女子選手の海外移籍の見本にもなることでしょう。

徳郎の思い･･･

ケルンの空から日本の女子へ、私の思いー。サッカーは女の子が気軽に始められ、仲間もたくさんできるヨ。そしてみんなから愛されるよ。一緒にボール蹴ってみませんか。

寄稿③【７月２９日（金）掲載】

“本物”追及するドイツ

心踊る首都ベルリン

第４日目（７月３日・日）

ケルン発の専用バスでヴォルフスブルクへ。所用時間は７時間。朝９時に出発したので到着は午後４時。強行スケジュールは続いていて、昼食はドライブインでサンドイッチとジュースのみ。日本食が恋しくなってきたのは私だけだろうか。

ヴォルフスブルクは緑豊かな大都市で男子チームも女子チームもブンデスリーガの最高レベルに位置しているため「１部リーグでプレーする都市」と呼ばれています。自動車産業の町でもあり、ビートル（英語でカブトムシなど甲虫類のこと）を世に送り出したフォルクスワーゲン社がその代表です。

さて、今晩は午後６時１５分キックオフのブラジル対ノルウェー戦の観戦です。夕食はスタジアムでのホットドッグ。観衆２万６０６７人（収容人数２万５０００人）で超満員。足の速さで魅了したのはブラジルのマルタ選手でした。ブラジルは、攻撃的でポジションチェンジも行いながらパスの変化、深い守備でセカンドボールへの速い対応のディフェンス陣、キーパーもセーフティにボール対応していました。ただ個人のテクニックに頼り過ぎた戦術やスペースを使われた時の対応など課題もありました。

一方のノルウェーは、旧来のサッカースタイルでディフェンスからトップへのロングボールのワンパターンで、若い選手の技術も育成されていない印象で完敗でした。試合終了後、午後９時に専用バスでベルリンへ向けて出発。同１１時３０分過ぎベルリンホテル着。さすが疲れました。

ベルリンは、２００６年にＦＩＦＡワールドカップの決勝戦が行われ、今回のＦＩＦＡ女子ワールドカップのオープニングゲームが行われています。収容人数７万４２００人に５万人以上の観衆で、地元ドイツ対カナダ戦の火ぶたが切って落とされたのでした。

ドイツの再統一後、ベルリンは世界有数の活気あふれる大都市へと発展を遂げ、１-２年後には国際空港が完成予定です。 “サッカーの祭典が幕開けする心踊る都市”がドイツの首都ベルリンです。

徳郎の思い･･･

日本のサッカーする子どもたちへ…。ワクワク・ドキドキの気持ちでサッカーボールを蹴るって気持ちイイヨ！と教えたい。

なでしこ勝機実感

第５日目（７月４日・月）

朝９時、ホテル会議室で指導者研修ミーティング。１１人を４グループに分け、観戦した６チームのゲーム分析を発表しました。対戦カード別にチームコンセプト、攻撃、ディフェンス、キーパー、組織力、立ち位置、選手交代、ポジションチェンジなどを的確に発表し、吉田、木村両コーチの指導を受けました。

同１０時３０分ベルリンからポツダムへ。約１時間の行程（バス）で日本代表の永里優季選手所属クラブ「ＦＦＣ　Ｔｕｒｂｉｎｅ　Ｐｏｔｓｄａｍ」を訪問しました。監督は７１才でプロリーグ唯一無給で指導している方です。もちろんブンデスリーガ優勝も成し遂げています。このクラブの特徴は、サッカー選手だけでなく、ボート・水泳・陸上などの選手も強化していて、サッカーだけの人生ではなく、サッカーを終えた後の将来を考えた人間性向上、独立心を育成し、クラブ生活も厳しく対応しています、とのこと。やはりドイツはマイスターの国で魂（本物）を追求していると感じました。

また、エリートシューレと呼称される特別推薦入学制度があり、１２―１８歳の６０人が、学校ではトレーニングも授業単位として認められますが、大学入学とサッカーの両立には課題もあるようでした。しかしポツダム大学と提携し、ゲーム分析や個人選手の体力などを図面や数値でチームへ還元しています。

戦術面では、ボールを速く動かすことによりゲームのテンポにスピードを付けることは、女子選手には効果的であり、ディフェンスはコンパクトに３人配置しスルーパスを防ぐ対策が中心となっています。永里選手も言葉にもなれ、チームとも調和できてきたようです。

今回のワールドカップドイツ代表の予想を監督に聞くと、「準備期間を３カ月も取り万全の状態で臨んでいる大会だが、カナダ、ナイジェリア戦では決して思い描いた内容、結果になっていない」とのこと。　“なでしこＪＡＰＡＮ”に勝機ありと実感しました。

徳郎の思い･･･

ベルリンの空からサッカーする子どもたちへ…。最後のホイッスルが鳴るまで絶対に諦めない強い気持ちは、夢をかなえてくれる一歩となります。

寄稿④【７月３０日（土）掲載】

世界のなでしこ育成へ

“らしさ”発揮できず

第６日目（７月５日・火）

ベルリン市内のホテルを午前１０時３０分に出発、ベルリン空港へ。国内線だが荷物の重量が２０㌔㌘限度で、オーバーすると超過料金を払わねばならず混雑していました。

午前０時４０分、空路ミュンヘンへ、同１時３０分ミュンヘン空港着。ホテルにチェックイン後、専用バスでアウグスブルクスタジアムへ。同６時１５分日本対イングランド戦がキックオフ。研修４試合目の観戦。

試合はスタートから“なでしこ”らしさが全くなく、疲労が残っていたのか、立ち位置やボールプレッシャーも弱く、得点されてからもＤＦからトップへのロングボール攻撃では、フィジカルでも数段上のイングランドには勝てません。

悪いプレースタイルはこの日だけで、切り替えて次戦に向けてほしいと願う。終了後、参加者全員でアウグスブルク市内ビストロ酒場で懇親パーティー。一週間も一緒に行動していると、日本各地域のサッカー指導者の皆さんとのコミュニケーションも取れ、それぞれの悩みや情報交換など、カルチャーショックもありで帰国後には地域のサッカーに少しでも貢献できる参考にしたいと考え、話もはずみました。

徳郎の思い･･･

アウグスブルクからサッカーする子どもたちへ…。海外へ夢を持ってサッカーしよう！女の子も男の子も一緒にサッカーしよう！

三つの目標へ前進

日本女子サッカーの強化と釧路

なぜここまで日本の女子サッカーは強くなれたのか！私は日本サッカー協会の「“なでしこビジョン”、世界のなでしこになる」ことを実現するために女子サッカーに関わるすべての人々が共有し、遂行する三つの目標を定めたことだと言えると思う。

①サッカーを日本女性のメジャースポーツにする。２０１５年、女子のプレーヤーを３０万人にする。

②なでしこジャパンを世界のトップクラスにする。２０１５年、ＦＩＦＡ女子ワールドカップで優勝する。

③世界基準の「個」を育成する。「なでしこ」らしさとは、ひたむき、芯が強い、明るい、礼儀正しい。

この目標が選手指導者、審判などが共通認識しながら“ブレ”ない一貫体制確立ができていると思う。同時に海外でプレーする選手が増えたこと。アメリカでは澤・宮間あや選手がプレーしていましたし、現在ドイツには安藤、永里選手が、フランスには宇津木瑠美選手、鮫島選手はアメリカ、熊谷紗希選手はドイツ・フランクフルトの移籍が決まっています。海外でプレーする日本人選手は、体の大きな外国選手へのコンプレックスもなく、当たりに負けず、憶せずプレーしています。

しかし、海外のリーグへ行っても男子のような十分な契約金はもらえません。ほとんどがアマチュアリーグのため生活は厳しいのが現実です。金銭的にも支援し、日本代表の核として期待される選手に対し、世界のトップリーグでプレーできるよう促したのが、日本サッカー協会が創設した「海外強化指定制度」（支援金２０万円・１日１万円の日当）です。

金額は少ないですがこの制度を利用し、未来ある若い女子がどんどん海外へ行きプレーしてほしい。そしていつの日かプレー技術やメンタルを次世代に教えてやってほしい。それが必ず“なでしこ”が世界トップに君臨することになると思うからです。

そのためには、ＪＦＡ女子委員長・アテネオリンピックなでしこジャパン監督・上田栄治氏の育成の重要性理論が適確です。

「相手にハイプレッシャーをかけボールを奪う、奪ったボールを意図的にチャンスにつなげる」いわゆる「攻守にアクションするサッカー」で、切り替えの場面も重要で、日本が世界と戦うために目指すサッカーは、日本人のストロングポイントを生かす。体格・体力に劣る分、クレバーにテクニックを発揮しなくてはなりません。常に状況を見ながら、考えながら、動きながら、数的優位をつくりながらプレーする必要があります。それを支えるフィジカルフィットネスサッカーの本質の理解です。

「世界のなでしこになる」というビジョンを達成するためには、今まさに育成年代から取り組む必要性を指摘しています。

釧路サッカー協会にとっても格別の喜びがありました。出場を果たしたＦＷの高瀬愛実選手は、釧路市の「釧路リベラルティ」で練習、プレーし、協会のコーチのもとでめきめき力を付けたのです。本人はもとより家族の送迎で北見から来て練習参加していたことは並大抵の努力や情熱では押し量れない意志の強さも感じられます。

釧路地区女子サッカー選手も、先日Ｕ１５日本代表先発でベトナム遠征した菅原伶菜選手、惜しくもパスポートが取得できずに行けなかった林穂乃花選手（中学１年）など道内でも常にトップクラスの選手が育っています。 “なでしこＪＡＰＡＮ”に選手を送り込むサッカーの聖地に釧路サッカー関係者も地道に日夜頑張っています。

寄稿⑤【８月１日（月）掲載】

ドイツの再訪を期待

緑の色と深さに驚き

〈ドイツ雑感〉

ドイツは「環境の国」ともいわれ北海道と緯度もそう違いませんが、緑の色の深さと濃さには驚きました。都市はもちろん、町や村も緑があふれ、ゆるやかな田園風景のなかに、中世の面影を残したマチが点々と連なり、ロマンチック街道と古城には、ドイツの歴史が秘められていることを我々に伝えてくれました。

フランクフルト空港からアウトバーンに乗り、バスの車窓から見える風景では、高速道はコンクリートの壁で境界を建てられていますが、そのコンクリートを様々な植物が覆い、まるで初めからそこに草木があったように工夫されています。エコに配慮がなされ、壁の無い所から見える小さな小屋は週末にガーデニングや農作業をするためのセカンドハウスだと分かりました。公共の有休地を一般に借し出しているそうです。

ごみ問題にも通じることですが、ペットボトルが道に捨てられている所は全くありません。ペットボトル購入時にボトル代も加算してあり、返すと戻ってくるシステムになっていました。特にドイツでは水が貴重であり、ホテルの中で自販機のない所もあり、フランクフルトのホテルでは、レストランから１㍑ビンを１本９ユーロ（１ユーロ１２０～１３０円）で分けてもらったほどです。

トイレは美術館・博物館・スタジアムなどは無料でしたが、ドライブイン・レストランなどは基本的には有料でチケット販売機がある所と専属の人が付いていて清掃しながら、お皿にお金を入れるのを見ていました。料金は日本円で２０～３０円。

風力、太陽光発電に力

福島原発事故以来、ドイツではメルケル首相の判断で、２０２０年には原子力廃止が宣言されています。２０５０年には再生エネルギーを８５％に目標設定し、風力、太陽光発電に力を入れています。バスからは田園の風景と太陽光パネル設置風景が交互に見えていました。日本でも人間の知恵や知能で制御できないものは、安全・安心の面からも考え直さなければいけないと感じました。

ベルリンは、１９６１年ソ連が東西を遮断する壁を設置し、１９８９年の崩壊まで東西冷戦の象徴“ベルリンの壁”で有名なマチです。社会主義と資本主義、２つのイデオロギーが対峙した歴史の跡、壁の跡を示すプレートをポツダム広場で見ることができました。

ケルン駅を出るとすぐ目の前のあの有名なケルン大聖堂に圧倒されました。１２４８年から

６００年以上の歳月をかけ完成したゴシック建築の大聖堂。塔の高さは１５７㍍でドイツのゴシック教会としては最大。修復中で防護網がかかっている所もありました。中ではミサも行われていて、精緻な細工と内部のステンドグラスの荘厳な雰囲気に圧倒されました。外壁の彫刻の素晴らしさにもう少しゆっくり見ていたい感じでした。さすがに世界的建造物だなぁ、と思いました。

ホテルの朝食はどこも、ドイツパン・ハム・チーズ・ソーセージ・サラダ・果物で味もしっかりしていてホッとしました。ホテルには無く、ケルンで食べたホワイトアスパラは絶品。期間限定といわれていましたが、たまたまそのレストランにあったようです。

全員で夕食懇談

ケルンでは研修ツアー初めて全員でレストランで夕食懇談しました。ドイツビール・ソーセージ・ポテト・アイスバイン（豚の足を塩ゆでした名物料理）で盛り上がり、そこへケルン在住の日本人男女（２５－２９才）６～７人が合流。ケルンにはスポーツ大学があったそうで、スポーツ資格を取るため、留学してサッカーの年少チームなどをコーチしたりしているそうです。日本とドイツの父兄との違いはありますか？と聞くと、ドイツの親は試合結果に相当な反応をするので、子どもたちの指導にも影響します、と困惑顔でした。

ホテルの窓の外は緑があふれていて、鳥の声が朝に夜に聞こえ、自然を身近に感じられ癒やされました。マンションのバルコニーには朝早くから花々の水やりや花殻つみをしているらしい人の姿が見えました。

静かで落ち着きのある歴史の町、ドイツの再訪を期待しペンを置きます。

（おわり）